

連載
第13回

福聚山史

篠原 重一
及川 一晋
編 文

本山と常円寺

1、平賀本土寺

江戸時代の常円寺については、元禄十六(一七〇三)年と延享四(一七四七)年、および文政三(一八二〇)年の『地子古跡寺社帳』や文政期(一八二〇年代)に編纂された『御府内寺社備考』に記録があるが、そのいずれにも常円寺は「平賀本土寺末」なる文字がある。それはいったい何を意味するものなのか。ここでは本土寺と常円寺との関係を中心に申し述べていきたい。

本土寺とは、日蓮聖人ご自身が文永六(一二六九)年にお建てになったお寺で、下総国葛飾郡平賀村に所在する日蓮宗の本山である。江戸時代の最盛期には二十間(三十六m)四面の本堂を中心に七堂伽藍を競い、四院六坊が山内にあり、百五十ヶ寺の末寺を関東地方を中心に持つ雄刹であった。そして常円寺はその遠末頭寺とされていた。つまり百五十ヶ寺の末寺のうち江戸表にある末寺の取纏めを行う格式と役割を与えられていたのである。

本山と末寺を系統づける、いわゆる本末制度は、わが国において中世後期に早くもみられるが、その体制が確立されたのは近世・江戸時代といわれている。江戸幕府は

寛永九(一六三二)年に、本末関係を把握するため諸宗本山に対して、末寺の書き上げを命じた。さらに元禄五(一六九二)年には、完全なる「寺院本末寺帳」の提出を命じたのである。

その目的・理由についてはひとことごとくいうならば、行政的な仏教統制機構を制度化する必要が生じたといつことであろう。この本末関係は、昭和十六(一九四一)年までの長きにわたり継続されたが、現在は解消・解体され、寺院行政上は存在しない。しかしながら、福聚山常円寺の歴史を語るに欠くことのできない事柄であるため、書かないわけにはいかない。

さて、本土寺に参拝するには、以下のとおりだ。まずは、常円寺のある新宿駅からJR山手線に乗り西日暮里駅で常磐線に乗り換えて松戸駅まで行き、さらに千代田線に乗り継ぎ北小金駅で下車。すると、駅北口より本土寺の参道へと続く道がある。「長谷山本土寺」という文字を刻んだ石門を過ぎると、左右には松・杉・樺・椎・桜な

どの古木や雪柳が連なり厳肅さと華やかな空気に包まれる。数軒ほどの土産物を商う店もあるが、ときには近在の農家の方が商う野菜の出店なども見られる。喧騒の中にある東京の寺院とはちょっと異なる趣を感じる場所だ。参道のつきあたりに丹塗りの楼門が現われる。ここからが寺の領域となるため、受け付けで拝観料を支払い寺内に入る。現在、寺地は約一万坪である



長谷山 本土寺の本堂(日蓮宗新聞社『全国本山めぐり』より)

が、以前は倍の二万坪もあったといわれている。明治に入り新政府の『上地』取りあげ)によって減少されたのである。寺内には四季折々の花が咲き、特に紫陽花の名所

として知られているため、開花の時期には玄人・素人カメラマンたちの絶好の被写体となっている。

本土寺の歴史は古く開山以来七百年以上にも及んでいる。そのことについては大変興味深いものを感じるが、今回は常円寺との関係を明らかにする事が目的であるので本土寺の歴史は省略させて頂く。しかし一言書き加えるならば、本土寺は、日蓮聖人の弟子六老僧の一人日朗を祖とする門流『日朗門流』の拠点寺院なのである。比企谷長興山 妙本寺(鎌倉市大町)、池上長栄山 本門寺(大田区池上)、そしてこの平賀長谷山 本土寺、これらを総称して「朗門の三長三本」という。ともにそれぞれの山号・寺号に「長」と「本」の文字が使われているためにそう呼ばれているのである。

本土寺は近世前期、日蓮宗の不受不施派(一、法華経を信じない宗派の寺社へ参詣してはいけない) 二、法華経を信じない人には施しをしてはいけない) 三、法華経を信じない人から施しを受けてはいけない)の中心となり、そのために、幕府からの強い弾圧を受けることとなった。その後、二十一世日信上人(元禄六年、六十九才で入寂)の時代に受不施派(幕府に対し従順)の系統に属するようになったといわれている。それはお寺の存続のための厳しい選択であったと理解できる。不受不施派に対する幕府の激しい弾圧は永きにわたり、同派に対する呪縛は、江戸幕府瓦解後の明治九(一八七六)年になって解かれたが、その大きな傷を癒されぬまま今日に至っているのである。(つづく)